

## 序

昭和二十二年の早春、雲の低くたれ込めた重苦しい感じのする日の午後であつたかと思う。数名の同志が工業クラブの小さな部屋に集つた。その席には郷司浩平、野田信夫、森曉の諸君が顔を連ねておつたことをはつきり記憶している。会合の目的は、敗戦後の日本経済を如何にして再建するかにあつた。当時の極度に窮乏し昏迷した状態から判断して、われわれが立直るには、旧套にとらわれない利害関係を超越した強力な精神的結合体を中核として推進する以外には方法がなく、この構想による新団体の設立について完全に意見の一致を見た。かゝる準備的会合を重ねること数回、四月三十日、關西方面も含め七十数名の会員をもつて発足したのがわが経済同友会であつた。

こういう考え方の経済団体は戦前においてもその必要性を感じていたが、殊に敗戦後の実情にピツタリあてはまるものである。従つて爾来年と共に急速に発展を遂げ、現在においてはその組織は全国に及び、二千名に近い会員を擁する特異な有力な経済団体に生長したのである。この間経済の復興に非常に大きな貢献をしてきたことは自他共に認めるところであるが、将来においても益々この役割を拡大してゆくことである。

この団体が利害を超越した精神的な結合体であるため、一部においては「新番町会である」というような批判が行われたこともある。番町会の真の目的が何であつたかは知らないが、もし一般に印象づけられているようなものがそれであるとすれば曲解も甚しい。同友会々員がお互に誠意をつくし助け合うのは会の性質上当然のことであつて、そこに野心や陰謀のような不明朗なことは絶対に存在しない。

同友会が過去の驚異的發展を今後においても続けてゆくことは何人も疑わないであらう。たゞ遺憾なことはこの間において将来の光輝ある活躍を期待せられた大塚萬丈、山本勇助の両君を失つたことであるが、両君の靈も恐らくわが同友会の健全な歩みには満足せられておることであろう。五年史の編集に対しその喜びを共にすることが出来ないのは残念であるが、この機会に今は亡き友のありし日を想起し、本誌をその靈前に捧げたいと思う。

昭和二十六年十月

工藤 昭 四郎